



# 選手の自主性を重んじる 全力疾走野球で “戦国東都”を制覇

## 亜細亜大学硬式野球部

亜細亜大学野球部が東都大学秋季リーグで5年ぶりの優勝を果たしました。  
2008年には創立50周年を迎え、長年にわたり一線で活躍するプロ野球選手を始め  
数多くの野球人を輩出してきたその強さの秘密を取材しました。

TOPICS  
01

亜細亜大学硬式野球部の創設は昭和33（1958）年。大きくはない規模の大学だったゆえに設立当初は部員集めにも苦労したといえます。そんな時代を乗り越え、全国から実力選手が集まるようになり、これまでに、東都大学野球リーグ優勝17回、全日本大学選手権大会優勝4回、明治神宮大会優勝3回という輝かしい歴史を刻んできました。



生田勉監督率いる現在のチームの強さは「自主性」にあります。野球部員たちは全員、西多摩郡日の出町のキャンパスにある寮で共同生活をしています。学生たちが野球だけに打ち込めるのは春休みと夏休みの数カ月だけ。学期中は勉強が中心で、日曜日の総合練習以外はすべて各選手の自主練習に任されています。授業が終わった後、武蔵野キャンパス（境5-24-10）から1時間かけて寮に戻り、夜中でもグラウンドに出て練習をします。寮生活でも自ら考え、行動することを徹底し、弱音を吐かず、強い意思で練習を続ける選手たちの自主性を育んできたといえます。

リーグ戦が始まると大学の授業の出席が難しくなります。大学の先生方はこの時期になると試合のない土曜日に補習授業を実施。部員たちが野球と勉学の両立ができるようサポートしているのです。「全力疾走」をテーマに掲げる亜細亜大学野球部。その強さの源は、野球だけに偏らない優れた精神力を育む日々の生活にあります。

## たくさんの想いがチームを支えた

野球部だけではなく、夏に北海道で2週間ほどの合宿をします。今年は釧路で合宿を行ったのですが、暑い中にもかかわらず、地元住民のみならず、住民のみならず、人が練習を手伝ってくれました。ほとんどが退職された高齢者の方々です。本



野球部の寮にある本棚。生田監督の蔵書や寄付によるもの。部員たちは感想文を書きながら野球以外のことへも関心を広げる。

野球だけにすれば就職できる時代ではありません。部員たちには毎日、日記をつけさせ、月に1冊の読書感想文を書かせています。野球だけやっていただけで、部員たちが社会に出て困らないように大学での勉強はもちろんのこと、そのほかにも基本的な力を育てていきたいのです。

野球部は毎年、夏に北海道で2週間ほどの合宿をします。今年は釧路で合宿を行ったのですが、暑い中にもかかわらず、地元住民のみならず、住民のみならず、人が練習を手伝ってくれました。ほとんどが退職された高齢者の方々です。本



### 生田勉監督

1966年生まれ。  
亜細亜大学を経て  
NTT東京(当時)に。  
2004年に亜大監督に就任。

## チームを引っ張ってきた4年生選手たち

今年の野球部、  
どんなチームでしたか？



### 秋季リーグ優勝！

「必ずしも強いチームではありません。東都リーグの打率トップ10に入る選手もいなければ、エラーも多い」と生田監督は今年のチームを振り返ります。投手の軸は3年生の東浜巨選手です。東都リーグは、各大学に2勝で勝ち点1となります。今季は3連戦を行うと仮定し、1、3戦目には東浜投手が先発。2戦目は久里亜蓮投手が先発し、中継ぎ投手でつないでいくローテーションを組みました。スコアラーたちが相手投手の配球も研究し、狙い打ちで少ないチャンスで確実に得点する戦術です。シーズン前から徹底的に練習を重ねてきたこの戦術が見事に功を奏し、すべての2戦目で勝利。プレーオフで強豪、青山学院大学を下し、秋季リーグ5シーズンぶりの優勝を飾りました。



あおやぎたくみ  
青柳匠さん

経済学部経済学科 主将 内野手  
部員全員がひとつにならなければ優勝できません。スタンドで応援する控えの選手の方も大切です。一人ひとりが役割をまっとうできたチームだと思います。



なかにしじゅんぺい  
中西純平さん

経営学部経営学科 副主将 内野手  
自分たちで生活のルールを決め、全員で守っています。自主判断だから、間違ったら気付ける。生活のなかで判断力を身につけたことは野球にも役立ちました。



しもだてだいすけ  
下館大輔さん

経営学部経営学科 捕手  
ひたむきで泥臭いチームです。生田監督には本当にいろいろな話をしてもらいました。野球以外にもたくさんのことを学び、人間としても成長できたと思います。